〔論　文〕

日常生活と負債
――負債経済論を手がかりに――

王　　凌

論文要旨

アメリカのサブプライムローン問題に端を発した世界金融危機は，現代市場経済が抱える負債に関する諸問題を表面化・顕在化させた。これを契機として，負債問題が学際的な関心を集めるようになった。こうした世界情勢及び学術動向の中，近年，負債経済論―負債を基軸に据えて負債経済を分析する理論が注目されている。本論文では，総合的なアプローチで人間と負債の関係を把握する必要性を示した上，負債経済論をそのための有用な理論的道具の一つと捉え，負債経済論の理論的枠組と論理展開の仕方に関する分析により負債経済論の本質を把握することを試みる。

Ⅰ　はじめに

信用・貸出（credit）に関する議論は，経済学で古くから行われてきた（Werner，2014；古川，2020などを参照されたい）。1990年代に入ってから，情報の経済学や金融仲介理論，コーポレート・ファイナンス理論などの発展を背景に，信用・貸出が実体経済に重要な影響を及ぼすと提唱するクレジット・ビュー（credit view）が，現代金融理論の重要な発展の一つとして，多くの注目を集めてきた[1)]。純粋に経済学の観点から言えば，信用・貸出は，当然，債務者にとって負債になるが，本論文では，クレジット・ビューの枠組みを超えて，より広い視点，文脈で負債（debt）と負債を負った状態（indebtedness）の意味を検討・認識・理解することを試みる。

アメリカのサブプライムローン問題に端を発した世界金融危機（GFC: Global Financial Crisis）は，現代市場経済の負債に関する諸問題を表面化・顕在化させた。これを契機として，負債が経済社会にどのような影響を及ぼすかが，極めて重要かつ緊急の課題に挙げられ，学際的な関心を集めるようになった。こうした中，近年，人間の日常生活（everyday life）や主体性（subjectivity）の視点を導入しながら，人間と負債の関係に着目して理論化を試みる負債経済論が注目されている。

本論文では，負債経済論の理論的枠組と論理展開の仕方を検討し，その主要な論点を整理・分析する。本論文の目的は，負債経済論の本質を把握するとともに，金融的・経済的・社会的・心理的・道徳的・文化的な諸次元を横断的に結合させる手法で，市場経済システムにおける人間と負債の関係を考察することである。

本論文は，以下のように構成されている。第Ⅱ節では，先行研究を踏まえながら，負債が家計に与える

1）先行研究では，クレジット・ビューは，貸出市場における市場の不完全性を伴う「非新古典派的（non-neoclassical）」理論として理解されている（Boivin, Kiley, and Mishkin, 2011）。クレジット・ビューの詳しい内容については，Bernanke and Blinder（1988），Bernanke（1993），Bernanke and Gertler（1995），Bernanke, Gertler, and Gilchrist（1996），王（2005a, 2005b），Wang（2013）などを参照されたい。

無断転載禁止

影響を学際的に検討し，統合的な視座から人間と負債の関係を考察する必要性を導き出す。第Ⅲ節では，負債経済論の理論的前提を明らかにする。第Ⅳ節では，負債経済論の論理構成を体系的に検討する。最後の第Ⅴ節では，本論文のまとめを行う。

Ⅱ　家計への負債の影響：学際的な視点の導入

人間・負債関係の多元的な性質を示すために，本節では，先行研究の知見を踏まえながら，複数の学問領域の異なる視点から負債が家計（個人を含む）に与える影響について考察する。それによって，総合的な視点に基づき人間と負債の関係を理解する必要性を導出する。

経済学では，借り入れを家計が異時点間の消費の最適化（intertemporal consumption optimization）または消費の平準化（intertemporal consumption smoothing）を図るための金融的手段として捉えている。資金の貸借取引が可能であれば（言い換えれば，借り入れ制約がなければ），家計は将来の所得を今期の消費に用いること（つまり，今期は借り入れによって現時点の所得を超える消費を行い，将来にその時点の所得を使って今期に生じた負債を返済すること）ができ，それによって家計の効用・厚生を向上させることができるという考え方である（Zeldes, 1989; Morduch, 1995; Jappelli and Pistaferri, 2011 などを参照されたい）。

未来に関する不確実性や人間の合理性・能力の限界のような自然的な（不可避な）制約を「異時点間」の論理に組み入れると，人間による異時点間の意思決定は必ずしも良い帰結をもたらすとは限らない（Simon, 1955, 1957; Ainslie, 1975; Berns, Laibson, and Loewenstein, 2007; Ottaviani and Vandone, 2011; Achtziger *et al.*, 2015 などを参照されたい）。では，負債が家計にもたらしうるデメリットはあるのか。これは負債の本質，人間の本質ないし経済社会の本質を把握する上で非常に重要な問いであるが，先行研究で指摘されているように，これに関する経済学的研究は甚だ少ない（Brown, Taylor, and Wheatley Price, 2005；Cordray, 2013 などを参照されたい）。興味深いことに，サブプライムローン問題の発生以前，負債による逆効果に関する議論は，経済学においては主にコーポレート・ファイナンスの文脈で企業にまつわる問題系に傾斜し，企業中心に行われていた（Myers, 1977; Hennessy, 2005; Molina, 2005 などを参照されたい）。なお，近年，家計の過剰債務問題（household debt overhang）及びそれによる家計への経済的影響（例えば，家計の就業・労働供給や消費への悪影響）に関する考察が増えてきていることは，重要な研究動向として，指摘すべきである（Dynan, 2012; Donaldson, Piacentino, and Thakor, 2019; Bernstein, 2021 などを参照されたい）。

次に，経済学以外の学問分野も視野に入れて，負債が家計に及ぼす非経済的な影響について見ていく。

負債（特に，返済に問題がある場合）が人間の心理や精神状態，主観的幸福感（subjective well-being）に影響し，ストレス（stress），不安（anxiety），苦悩（distress），憂うつ（depression）などにつながる可能性があることは，多くの心理学や医学的研究によって明らかにされてきた（例えば，Hatcher, 1994; Hintikka, *et al.*, 1998; Drentea and Lavrakas, 2000; Brown, Taylor, and Wheatley Price, 2005; Bridges and Disney, 2010; Meltzer, *et al.*, 2013; Hojman, Miranda, and Ruiz-Tagle, 2016; Gunasinghe, *et al.*, 2018; Hiilamo and Grundy, 2020; Ferreira, *et al.*, 2021）。

Gathergood（2012）は，負債が人間に影響を及ぼすメカニズムにおいて社会規範（social norm）が媒介になっている可能性を提示している。例えば，倒産率のより高い地域で無担保負債の返済に問題が生じた場合や，住宅ローンの差し押さえ率がより高い地域で有担保負債の返済に問題が生じた場合に，債務者の心理的健康状態の悪化度合いがより軽くなるという興味深い研究結果が示されている。同研究は，その研究結果について，負債の返済がうまくいかない人々が多くいる地域では，返済困難についてまわ

無断転載禁止

る社会的不名誉・社会的恥辱（social stigma）の程度が軽減されると解釈している。また，同研究は，負債に関わる社会規範の背後に人々と負債との日常的な関わりがあること（換言すれば，負債の返済義務は人々の日常生活の意識に内面化される社会規範になっていること）も示唆している。

Nettleton and Burrows（1998）は，人間と負債の関係を理解する際に社会的・文化的・時代的背景を考慮に入れる必要もあることを示唆している。著者たちは，住宅ローンの返済問題が男女双方に対し主観的幸福感を引き下げるマイナスの影響を生み出すことを明らかにし，それを踏まえて現代における人間と負債の関係が個人化（individualization）の特徴を反映していると鋭く指摘している。同研究は，（当時のイギリスにおいて）健康・教育・雇用・社会保障などの諸領域で進行している「個人の責任というイデオロギー（ideology of individual responsibility）」を基に個人が自分の住まいに責任を持つべきという考え方が社会に普及したと示している。その上で，人間生活にとって基本的な要素・ニーズである住宅の確保に関わる責任を住宅ローンの形で各家計に負担させることにはデメリットがあると認識している。例えば，住宅ローンは一過性のものではなく返済期間が長期にわたる負債（デフォルトを回避するために持続的な努力が必要）であるため，日常生活で突如，何らかの支障・不意な出来事（失業や収入減，病気など）が発生して住宅ローンの返済が滞ると，家（人間生活を営む上での基盤の一つ）を失い，人々の安定した生活が脅かされるかもしれない。また，そのような可能性は，現代人の社会的・文化的生活の特徴の一つでもある不安感（insecurity）をさらに助長するかもしれない。

さらに，上に挙げた先行研究とも関連しているが，負債が人間に及ぼす影響は一律でなく，そこには大きな異質性が存在することも複数の学問分野の研究により明らかにされている。例えば，経済的（例えば，低所得者や失業者・不安定就業者であるかどうか）・社会的（例えば，低い社会階層に位置しているかどうか）・心理的（精神的健康状態が悪いかどうか）・身体的（例えば，身体的健康状態が悪いかどうか）・認知的（例えば，基本的な金融知識や家計管理能力が不足しているかどうか）に弱い立場に置かれる人々は，より負債問題に悩まされる傾向があるとされる（Lea, Webley, and Levine, 1993; Lea, Webley, and Walker, 1995; Webley and Nyhus, 2001; Babiarz, Widdows, and Yilmazer, 2013; Lusardi and Tufano, 2015; Oksanen, Aaltonen, and Rantala, 2015; Houle and Berger, 2017; Yabroff, *et al.*, 2019 などを参照されたい）。また，Fligstein and Goldstein（2015）は金融文化の観点から，（アメリカでは）家計の所得水準によって負債利用のパターンが異なることを明らかにした。すなわち，所得が比較的高い家計は，高級車や一等地にある大きな住宅，二軒目の住宅などの地位財（positional goods）を購入するために負債を利用しているのに対して，所得が比較的低い家計は，収入減から生活を防衛し日常生活を維持するために負債を利用している（借りたお金を日常的な家計支出に充てる）のである。これらの先行研究は，負債が不平等・格差を増幅させかねないことを示唆している（Iacoviello, 2008; Berisha and Meszaros, 2018; Wood, 2020 なども参照されたい）。

以上，先行研究を検討することで，人間と負債の関係に対する理解と認識をより増進させるための理論的な方向性として，少なくとも次の二つが浮かび上がってくる。

第一に，負債は，現代市場経済システムの中に生きる人々の日常生活と密接な関わりを持つものであり，多面的な観点（例えば，上に示したような，金融的・経済的・心理的・社会的・文化的な観点など）から捉えることができる。言い換えると，負債について考える方法は実に多様である。「群盲象を撫でる」のように，角度や文脈などによって負債の意味合いや負債の特質についての発想・判断・認知が異なるのである。そして，負債がこのような多面的な性格・複数の次元を持つ存在であるからこそ，多面的・多元的に分析する必要があると言えよう。さらには，負債の全体像をつかむために，多くのピースを集める作業にとどまらず，いかにそれらを組み立ててジグソーパズルを解くかという「合」の作業も必要となるであろう。

第二に，先行研究では，負債が人間の心理や意識など主観的な要素にどう影響を与えるかについて，

無断転載禁止

その具体的なメカニズムが不明瞭である（Richardson, Elliott, and Roberts, 2013; Amit, *et al.*, 2020 などを参照されたい）。そこには負債をより広く・より深く理解するための重要な問題が潜んでいると考える。例えば，なぜ負債にはそのような影響力があるのか，負債はどのような形で人間の内面に影響するのか，さらに，社会にいる人々の主観の領域に影響を及ぼすことによって負債は社会全体にどのような結果を生じさせうるのかなど，これらの問いを考察することは有意義であろう。

上記の二つの方向性に沿って負債を思索する際に，われわれにとって有用な理論的道具の一つと考えられるのが，負債経済論である。負債経済論は，負債を基軸に据えて負債経済（debt economy）を分析する理論である。ただし，負債経済論の文脈における負債経済という用語の意味に留意する必要がある。負債経済論では，負債経済は金融経済と同義ではない。負債経済論の主張によると，負債は金融にはない特質・機能を有しており，負債経済は「金融経済を含みながらも，そこからはみ出る」経済であり（ラッツァラート，2012，p.20），また，「基本的なニーズを満たすために，多額の借金を負わなければならない経済（an economy where in order to satisfy one's basic needs one must incur large debts）」（Caffentzis, 2016, p.187）である。これと密接に関連して，後ほど詳しく説明するように，負債経済論では，負債は社会全体を覆うものという意味合いを持つ概念であり，また，債務者は労働者，福祉・公共サービスの利用者，消費者などを含めた，市場経済システムにおける人間の広範な活動域を包摂する概念である。

負債経済論は，人間と負債との関係を解明・理解するための一つの仮説であるが，この仮説によって，いかなる構図・様相が描けるであろうか。次節以降では，負債経済論の理論的前提と論理構造を明示的に論じることで，負債経済論の展開及びその要点を明確化し，負債経済論の本質を考察する[2)]。

Ⅲ　負債経済論の理論的前提

負債経済論の理論的特徴を端的に述べれば，債務者の内面に入り込んで債務者自らに何らかの働きを促す負債の特質に注意を払い，負債経済がいかに負債をテコにして，人間生活・社会・統治のあり方に大きな影響を及ぼすかを論じるもの，ということになる。

そもそもなぜ負債は債務者の内面に働きかけることができるのか。負債経済論では，負債に内在する道徳性と非対称性をもって説明する。言い換えれば，負債経済論は，負債のこの二つの性質を前提に理論を構築している[3)]。両方とも，債務者に債務者としての自覚を促し，負債を完済しようとする債務者の自発的努力を引き出す作用があると考えられる。

1．負債の道徳性

社会学者マウリツィオ・ラッツァラート（Maurizio Lazzarato, 1955- ）は，負債が「固有の道徳を分泌する」（ラッツァラート，2012，p.46）という巧みな表現を用いて，負債がいかに道徳と密接に結びついているかを説明している。負債の道徳性とは，具体的に言えば，借りたお金を契約通りに利子をつけて返済期日までに債権者に返済しなければならない，という債務者としての負い目・義務である。言い換え

2）本論文では，負債経済論の理論的枠組みを検討し，その鍵となる要素を取り出して提示する。負債経済論に関するより包括的かつ総合的な考察は，大黒（2021）を参照されたい。また，負債経済論の各論者の主張に興味深い相違が存在する（グレーバー，2012，訳者あとがき；Lazzarato, 2015；大黒，2021 などを参照されたい）が，ここでは，負債経済論の本質を明確に把握するため，各論者の主張の共通性に重点を置いて検討する。

3）負債経済論の理論的前提は，これから見ていく通り，ニーチェ（1940）の第二論文（「『負い目』・『良心の疚しさ』・その他」）に依拠しているところが多い。この意味で，負債経済論において，フリードリヒ・ニーチェ（Friedrich Nietzsche, 1844-1900）のこの哲学的洞察の現代的な意義を再評価・再発見していると言えるであろう。

無断転載禁止

れば，負債は，経済や法律などの次元だけでなく，道徳の次元においても強制力を持っているのである。

負債の道徳性は，負債契約を結んだことに責任を持ち，負債を支払う約束を記憶し，かつその約束の遵守を促すことによって，債務者の内面を支配する。ニーチェが言うように，債務者が債権者に対して負債を負っている場合，債務者は「返済を義務や責務として内心に銘じておく」（ニーチェ，1940，p.92）。それゆえ，「ここでこそ約束がなされる。ここでこそ約束者に記憶させることが問題となる」（Ibid.,傍点は原著者）。ここの「記憶」は，ニーチェによれば，「単に一旦刻み込まれた印象から再び脱却することができないというような受動的な状態では決してなく，また単に一旦質入れして再び請け出すことができなくなった言質の惹き起こす消化不良でもない。むしろ，再び脱却したくないという能動的な意欲であり，一旦意欲したことをいつまでも継続しようとする意欲であり，本来の意志の記憶である」（Ibid., p.81，傍点は原著者）。このように，負債の文脈における「記憶」には，主体を構築し，意識を創り出すという能動的な意味合いが込められていることに留意すべきである。

また，ニーチェは，負債の道徳性には人間の主観的な自己解釈が潜んでいること，そして，そのような主体性・主観性が普遍的性格を持つことを，次のように指摘している。「負い目とか個人的な責務という感情は，われわれの見たところによれば，その起源を存在するかぎりの最も古い最も原始的な個人関係のうちに，すなわち・・・債権者と債務者の間の関係のうちにもっている。ここで初めて個人が個人に対峙し，ここで初めて個人が個人に対比された。この関係がすでに多少でも認められないほどに低度な文明というものは，未だに見出されないのである」（Ibid.,p.103，傍点は原著者）。

では，人間が負債の道徳性を意識し始めたのはいつ頃なのか。それは紀元前にまで遡る。サンスクリット語で書かれた初期の宗教文書（負債の性質に関して，知られている限りもっとも古い史料とされる）では，負債は「『罪責性（guilt）』および『罪業（sin）』の同意語として扱われている」（グレーバー，2016，p.84）。また，ニーチェは「これら従来の道徳系譜論者たちは，例えば『負い目（シュールト）』（Schuld）というあの道徳上の主要概念が『負債（シュールデン）』（Schulden）という極めて物質的な概念に由来しているということを，ただ漠然とでも夢想したことがあったろうか」（ニーチェ，1940，pp.89-90）と述べ，負い目の起源を負債（債権者と債務者の関係）に見出している。これらの指摘は，負債に関する道徳的義務が，人類社会に長く存在した規範として，人間の意識・行動に拘束を加えてきたことを示唆していると見なすことができるであろう。その社会規範の下では，負債の道徳を守らない人間には共同体内で「信用力が低い」「信用できない」という悪評が立ち，また彼ら自身も自分が悪い人間であると感じる（つまり，道徳的負い目や良心のやましさを感じる）ようになる。このように，社会規範に対する人間の服従（換言すれば，人間に対する社会規範の強制力や，信用力に関する社会的評判）は，負債の道徳性をさらに強化しうる[4)]。

２．負債の非対称性

負債には二種類の非対称性が存在することは，先行研究によって明らかにされている。一つは力の非対称性で，もう一つは時間の非対称性である[5)]。

４）社会学者エミール・デュルケム（Émile Durkheim，1858-1917）は，慣習・規範を自ら提起した「社会的事実」（デュルケム，1978，pp.51-69）という概念の具体例として捉えている。デュルケムが「社会的事実は，それが個人のうえにおよぼす，ないしはおよぼしうる外部的な強制力によって，それとして認められる」と述べていることからも分かるように，社会的事実の特質は，外在性（個人意識の外部に存在するという属性）と拘束性（個人意識に拘束を加えるという属性）である。また，社会学者マーク・グラノヴェター（Mark Granovetter，1943-）によれば，「『規範』とは，人々が承認し，時折従い，適切であり，ふさわしく，あるいは，『道徳的』に行動するための方法に関する原理であり，これらは，社会的に共有され，他者によって非公式に施行される」（グラノヴェター，2019，p.32）。

５）負債に内在する非対称性は，債権債務関係と，新古典派経済学の理論的前提となっている平等・対等な市場的交換関係が根本的に異質のものであることを示唆している。負債の本質把握にとって，この点に留意する必要があるであろう。

無断転載禁止

（1）力の非対称性

負債が完済されていない状況においては，債権者と債務者の関係に根本的な力の非対称性――債権者が支配者・上位者，債務者が被支配者・下位者という非対等性が存在しており，これはずいぶん前から認識されている。例えば，ニーチェは，債務者が負債を返済しない場合，債権者が力を行使して債務者に苦痛を与えることから最高度の快感を得ることができ，そして，その快感――「非力な者の上に何の躊躇もなく自己の力を放出しうるという快感，≪悪を為すことの喜びのために悪を為す≫愉悦，暴圧を加えるという満足感」(Ibid., p.93) ――は債権者が受けた被害の補償となりうることを述べている。

ここで特筆に値するのは，債権者と債務者の関係における力の非対称性と先述した負債の道徳性が高い親和性を持ち，互いに補完・強化する可能性があることである。つまり，一方では，債権者と債務者の間の力の非対称性は，債務者の道徳から逸脱する行動を抑制する作用がある[6)]。他方では，負債の道徳が強力な社会規範となっている社会においては，債権者が債務者に対して絶対的な支配的地位に立つことも長く続くであろう。

人類学者デヴィッド・グレーバー（David Graeber, 1961-2020）は，先行研究のこうした議論を踏まえ，負債を「完遂にいたらぬ交換」(グレーバー，2016, p.183) と位置付け，負債の負債たるゆえんが負債の完済により当事者間の平等性・対等性・均衡が回復されることだと繰り返し指摘している。例えば，「わたしたちがそれを『借り［負債］』と呼ぶのは，それが返済可能であり，平等［対等性］が回復可能だからである。・・・負債が返済されていないあいだ，ヒエラルキーの論理が支配的になる」(Ibid., p.182, 傍点は原著者)[7)]。

グレーバーのこうした主張を逆に考えると，負債を完済すれば，債務者は対等な立場を取り戻せるということである。したがって，人格の平等を回復したいという人間本来の基本的な欲求は，債務者を努力に駆り立て，負債を返済しようとする動機付けになると言えよう。

（2）時間の非対称性

負債経済論が重視する，負債固有のもう一つの非対称性は，時間の非対称性である。負債における時間の非対称性には二重の意味があると理解できるであろう。一つは，負債は過去に結んだ契約によって定められた確実的な存在（返済金額も返済期日も確定されたもの）であるが，この実存の負債の返済は現在から将来にわたるため，多くの不確実性が伴うという意味である。もう一つは，債務が完済されない限り，現在から将来にわたる債務者の行動は常に過去に契約した負債及び債務者自身の過去の行動によって規定・制限されるという意味である（傍点は筆者）。

債務者は，現在から将来にかけて，返済プロセスに随伴する不確実性や未来への不安・恐怖を克服し

6）ニーチェは，「苦痛を与えること」によって債務者に「意志の記憶」を植え付けることが「記憶術の最も有効な手段」(Ibid., p.87) であると認識し，「烙きつけるのは記憶に残すためである。苦痛を与えることをやめないもののみが記憶に残る」(Ibid., p.86, 傍点は原著者) と指摘している。この指摘は，債権者と債務者の間の力の非対称性がなければ，負債の道徳性の基盤と効力が弱まることを提示するものと理解できる。

7）グレーバーは，このほかにも債権者と債務者の関係について重要な指摘をしている。そのいくつかをここで引用する。「負債とは，いまだ均衡が回復されないときに発生するものだからだ」(Ibid., p.137)。「負債とはきわめて個別具体的な事象である。そして負債は，きわめて具体的な状況から生まれる。それがまず必要とするのは，根本的に異なっている存在とはたがいにみなしていない二人の人間の関係である。少なくとも可能性としては対等であり，本質的な次元において実際に対等であるのだが，現在のところ対等な地位にはない。だが，事態を回復するなんらかの方法がある，といった二人の関係である」(Ibid., p.181, 傍点は原著者)。「負債とは，あいだ［中間］で生起するものである。二名の当事者がいまだ対等でなく，それゆえ，たがいに背を向け合うことができないときに生起する。だが負債の実行されるのは，いずれ対等［平等］でありうるというきざしのなかにおいて，である」(Ibid., p.183)。

無断転載禁止

なければならず，また，負債の完済まで持続的に自分自身に働きかけて負債の返済と両立可能な行動様式や生活様式を取るよう努力する必要がある。この時間的なプロセスにおいて，債務返済のため自ら日常の行為を制限し，日々主体的に努力していれば，そのような自己管理は（債務者の）日常的なルーチンに転化する。そして，債務返済が現実の日常生活の中で具体化・習慣化・日常化されると，返済義務や返済努力など返済に伴う心身的苦痛が当然自明のこととして，債務者に受け入れられるようになる。このように，負債における時間の非対称性によって，負債は，反復的，持続的，常態的，規則的に債務者の内面に働きかけ，彼らの主体性を構築・調整することが可能である。[8)]

留意すべきなのは，負債における時間の非対称性も，先述した負債の道徳性と整合的ということである。すでに述べたように，負債の道徳性の支配下にあっては，債務者は債務返済に関する約束をする。負債における時間の非対称性は，債務者に対して，過去に自らなした約束を記憶することと同時に，その約束を実際に果たせるよう未来を予見し，積極的に運命（未来に潜んでいるあらゆる可能性を含め）に対処することを要求する。

債務者に必要な，未来について予測・計算・対応する能力に関し，ニーチェの次のような二つの指摘は示唆に富んでいる。「・・・未来を予め処理することができるようになるためには，人間はまず，必然的な生起を偶然的な生起から区別して，それを因果的に考察する能力，遥かな未来の事柄を現在の事柄のように観察し予見する能力，何が目的であり何がそれの手段であるかを確実に決定する能力，要するに，計算し算定する能力を習得してかかることを，いかに必要としたことか！―― 一個の約束者として未来としての自己を保証しうるようになるためには，人間は自らまずもって，自己自身の観念に対してもまた算定しうべき，規則的な，必然的なものになることをいかに必要としたことか！」（Ibid., p.82，傍点は原著者）。「人間は風習の道徳と社会の緊衣との助けによって，実際に算定しうべきものにされた」（Ibid., p.83，傍点は原著者）[9)]。

また，債務者が時間の不確実性からもたらされるリスクを引き受け，そして，自己の行動の不確実性を減らすこと（換言すれば，将来の債務返済に向けて，負債により規定・制限された枠内で日常規則的に行動すること）をもってそのリスクに対処せざるをえないことは，債権者・債務者間の力の非対称を体現していると理解できるであろう。この意味で，負債における二つの非対称性――力の非対称性と時間の非対称性も，互いに整合性を持っていると言えよう。これもまた興味深いことである。

Ⅳ　負債経済論の理論構造

前節では，負債経済論の理論的前提を示した。本節では，負債経済論の論理展開を個人レベル・社会レベル・統治レベルという三層構造で提示し，その理論的枠組みを体系的に描き出す。

8）Wozniak（2017）は，リズムの視点を負債経済の分析に導入し，負債は律動性に富んだ実体（entity）であり，負債の持つ力には債務を抱えた人々の生活のリズムを作り，それを通じて債務者の主体性を創り出すというリズミカルな特徴があると論じている。上述のような，負債を返済するために現在から将来にかけて自分自身に繰り返し働きかけることは，この文脈で考えると，同研究が指摘した「現代の負債経済における日常生活の様式と主体性に作用する負債の律動的な力（debt's rhythmic force on the patterns of everyday life and subjectivity in the contemporary debt economy）」（Ibid., p.502）の体現であると理解してよいであろう。

9）ニーチェは，自分が打ち出した概念「風習の道徳」について，次のように説明している。「私が『風習の道徳』と呼んだあの巨怪な作業――人間種族の最も長い期間に人間が自己自身に加えてきた本来の作業，すなわち人間の前史的作業の全体は，たといどれほど多くの冷酷と暴圧と鈍重と痴愚とを内に含んでいるにもせよ，ここにおいて意義を与えられ，堂々たる名分を獲得する」（Ibid., 傍点は原著者）。

無断転載禁止

1．個人レベル

個人レベルにおいて，負債経済論は，負債がどのようなメカニズムで債務者個人の主体性・主観性（an indebted subjectivity）を構築・調整しうるのかという問題意識のもと，論理を展開している。

既述の通り，負債に内在する道徳性と非対称性は，互いに関連する形で，債務者が，自分自身に不断に働きかけ，債務返済の約束を記憶し，かつその約束を果たせるように忍耐強く努力し続ける主体になることを促す力となりうるのである。この過程は，ラッツァラートの表現を借りて言えば，「『身体』と『精神』を同時に刻印する主観的主体化の過程」（ラッツァラート，2012，p.60）である[10]。換言すれば，負債は，個人レベルにおいては，人間の主体性に直接的かつ強力に影響し，人間の行動を変えることができるのである。この意味で，負債経済論は，主体・主体性・主体化に対する理解を深めるヒントにもなりうる。

Lazzarato（2015）が示唆するように，人間に与える影響に関して，債権債務関係は資本労働関係と次の点で大きく異なる。まず，労働者は，生産工場という閉ざされた空間と労働時間という限られた時間の中で支配されている。「しかしながら，負債による支配は，開かれた空間と無限の時間，つまり生活そのものの空間と時間の中で行使されるものである（Control through debt, however, is exercised within an open space and an unlimited time, that is, the space and time of life itself）」（Ibid., p.69）。次に，労働者を支配する力は，その労働者の外部に存在する，比較的容易に認識できる人や装置であるが，負債は債務者個人の内面に入り込んで債務者の主体性に働きかける。さらに，労働者は自分を支配する力に抵抗するために，自己を動員するだけではなく，ほかの労働者の力や労働者同士の結束・連帯に頼ることもできる。これに対して，負債は債務者の内面に働きかけ，主体性を創り出す（言い換えれば，負債は債務者に自助努力・自己責任を内面化させる）ため，このような主体構築は，負債経済に順応するよう債務者を導き，債務者の従属化と社会の個人化を推し進め，人々の連帯意識を衰退させる[11]。

10）「主観的主体化」は，哲学者フェリックス・ガタリ（Félix Guattari, 1930–1992）によって提唱された概念である。「主観性の生産」によって「主体」は「主体化」するという意味になるが，「主観性の生産」は「三つの様態が交錯する複合的過程である。すなわち――（1）人びとの身体や精神を外部からの直接的強制によって限定し支配する権力の様態，（2）経済的・技術的・科学的プログラムに人びとが内面から適合していく知の様態，（3）人びとが自らの座標系を打ち立てようとする自己参照的な生成変化による自己創出の様態，この三つである」（Ibid., 訳者あとがき，p.228）。三つの様態について，詳しくは，同書の訳者あとがき（pp.228–229）を参照されたい。

11）これは負債経済における一種の人間疎外現象と理解してもよいであろう。債権債務関係によってもたらされる疎外について，別の視点からの解釈もあることに留意すべきである。例えば，かつて，カール・マルクス（Karl Marx, 1818–1883）は，次のように，信用（クレジット）が人間疎外の傾向を内包することを指摘した。「・・・信用システムにおいては，外部からの物質的力は断ち切られ，自己疎外の状態は廃棄されて，人間は再び人間との人間的諸関係のなかに置かれる。・・・しかし，この疎外の解消，この人間のおのれ自身への――したがって他者への――回帰は，錯覚にすぎない。それは，信用なるものが金属や紙などといった商品ではなく，人間としての道徳的存在，社会的存在，人間の奥深い精神そのものであるがゆえに，いやまして忌むべき非人間化であり，自己疎外なのである。この疎外は，人間の人間への信頼という見かけを持ちながら，これ以上ない不信，完全な疎外にほかならないのである」（ラッツァラート，2012，pp.76–77）。また，Caffentzis（2016）では，負債が人間にもたらしうる疎外について，次の三つの新しい形式（上記のマルクスとラッツァラートの解釈と異なるという意味での新しい形式）を指摘している。（1）負債で購入したモノからの疎外（負債で購入したモノは，その負債を完済しない限り，債務者のモノにならないという意味での債務者の疎外）；（2）債務者自身からの疎外（負債で購入したモノから得られる現在の満足感・快楽は，債務返済に伴う未来の苦痛・生活様式と行動様式の不自由を生み出すという意味での債務者の疎外）；（3）ほかの債務者からの疎外（負債から道徳的負い目や恥，罪責感などが生起するため，債務者，特に返済に問題のある債務者は自分が債務者であることや自分の窮状を自分と同じ立場のほかの債務者に明かさないという意味での債務者の疎外）。

無断転載禁止

2．社会レベル

負債経済論では，負債を，社会全体を覆うものとして捉え，負債の論理が個人レベルの次元にとどまらず，社会的領域に入り込むと主張している。この社会レベルにおいて，負債経済論は，債権者と債務者の関係がいかに他の社会関係に影響を与えるかという問題意識に立ち，理論的展開をしている。

負債経済論は，公的債務の増加，労働市場の規制緩和・雇用の流動化，社会保障の給付内容の縮減・福祉支出の削減，経済格差（所得格差や資産格差など）の拡大，借金による消費の増大など世界的な潮流の変化を察知した上で，負債（債権者と債務者の関係）が今日の経済社会を分析する重要な道具であることを示唆している。

先述した歴史的変化の中で，雇用面での不利益（失業や不安定雇用，低賃金など）を被った労働者，社会的サービス・福利厚生給付を削減された社会保障の利用者，過剰債務を抱えた消費者・家計が世界規模で増加している。これは，多くの人々にとっては，社会経済活動や社会生活の様々な場面における，引き受けざるをえないコストとリスクの増大へとつながっていく。こうした世界的に起きている現象について，ラッツァラートは，現代の人間は「『自らの経済的な運命に全責任を負う』という原罪を背負わされた〈借金人間（ホモ・デビトル）〉という実存的状況」（ラッツァラート，2012，p.19）に陥っていると指摘した上で[12]，「債権者／債務者の関係は，資本／労働，福祉国家／利用者（ユーザー），企業／消費者といった関係に重ねあわされ，それらの関係を貫いて，利用者（ユーザー）・労働者・消費者を〈債務者〉に仕立て上げる」（Ibid., p.46）と述べている。

ラッツァラートのこの指摘が，二つの重要な意味を持っていることに留意すべきであろう。一つは，債権者と債務者の関係が，広い範囲にわたって他の社会関係に看過できない影響を与えられることである。この意味で，債権者と債務者の関係は，社会を横断するものとして，ある種の超越性と普遍性を有していると理解できるであろう。もう一つは，社会レベルの，債権者と債務者の関係が生じさせた社会変容は，個人レベルの，負債による主体性構築と密接に関連していることである。先に見たように，負債は，個人レベルでは，債務者に自らへ働きかけるよう促し，将来の債務完済に向けた債務者の自発的・主体的努力を引き出す作用を持っている。したがって，ラッツァラートのこの指摘は，社会的に「債務者」に仕立て上げられた労働者・社会保障の利用者・消費者が，ひとりひとり自分自身に働きかけて，「負債の返済」と両立する行動様式や生活様式をわが身に引き受けることと解釈できるであろう。

3．統治レベル

さらに，負債経済論は，負債（債権者と債務者の関係）が統治技術になりうることを提示する。すなわち，統治権力が負債に内在する道徳性・非対称性を利用し，社会における人々の内面への介入を通じて，社会全体を支配・コントロールすることである。特に，負債を新自由主義の根幹をなすものと捉え，実際に新自由主義政策が，債権者と債務者の関係を通じて展開されていると説く[13]。

例えば，ラッツァラート（2012）は，「負債の製造，つまり債権者／債務者の権力関係の構築と発展は，新自由主義政策の戦略的核心として構想され計画された。・・・新自由主義が最初から負債の論理を中心に構築されたもの」（pp.40-41）であると言明している。また，Lazzarato（2015）は，「負債は，新自由主義のホモ・エコノミクス（ホモ・エコノミクス）の製造に最も適した技術である（Debt is the technique most adequate to the

12）ラッツァラート（2012）によれば，「概念的人物としての〈借金人間（ホモ・デビトル）〉」（p.75）は「主観性の生産と統制の特殊な様態」（p.46）であり，「経済的人間（ホモ・エコノミクス）の特殊な形態」（Ibid.）である。

13）先行研究においては「新自由主義（Neoliberalism）」という言葉が非常に多義的に用いられているが，新自由主義では市場原理・競争原理の導入，規制緩和と自己責任原則の推進，福祉・公共サービスの縮小，政府による市場環境の整備などが図られると一般的に認識されている（ハーヴェイ，2007; Ferguson, 2010; Dean, 2014; Venugopal, 2015などを参照されたい）。

無断転載禁止

production of neoliberalism's *homo economicus*）」（p.70）という認識を示している。さらに，グレーバー（2016）は，新自由主義の世界において，「わたしたちだれもが，投資家と実務執行者（executive）のあいだのかねてよりの関係――すなわち，冷徹に計算する銀行家と，借金を負い自尊心のいっさいを捨て名誉なき機械にみずからを貶めた戦士たちの関係――をめぐって組織された小株式会社として，みずからを認知するようになったのである」（p.557，傍点は引用者）と指摘している。

このように負債は新自由主義の下で重大かつ広範な影響力を有するが，その影響力はいかにして生じたのであろうか。負債による新自由主義的統治はどのようにして可能となったのか。ラッツァラートによれば，新自由主義の下では，「社会的なものの生産から〈借金人間〉の生産への転換」（ラッツァラート，2012，p.160）が行われる。より具体的に言えば，「新自由主義の緊縮政策は，あらゆる社会的権利（年金，健康，失業など）の制限，公共サービス，公的雇用，公務員の給料などの削減に集中しているのであり，それは〈借金人間〉を創り出すためなのである」（Ibid., p.161）ということである。その結果，「社会的諸権利」が「社会的負債からさらに私的負債に変化し，その利用者は債務者に変貌する」（Ibid., p.164）のである。

哲学者ミシェル・フーコー（Michel Foucault, 1926–1984）によれば，新自由主義的統治は，自己責任原則のもとで自己統御可能な「企業家」をモデルにした主体を要請する（Foucault, 2010）。新自由主義によって製造された「借金人間」は，負債返済のため，「自分自身の企業家（entrepreneur of himself）」（Ibid., p.226）のように生活様式や行動様式の自己管理を強いられることになる。

Ⅴ　おわりに

本論文では，総合的なアプローチで人間と負債の関係を把握する必要性を示した上，負債経済論をそのための有用な理論的道具の一つと捉え，負債経済論の理論的枠組みなどについて考察した。本論文の分析により，負債経済論が，負債に内在する道徳性と非対称性という二つの性質を理論的前提にし，個人・社会・統治という三つのレベルで理論を構築・展開していることを明らかにした。

負債経済論の論点には，示唆に富んだものが多い。例えば，負債が債務者に自助努力・自己責任を内面化させることで人間の主体性に重要な影響を与えることを明確に示す点や，広い文脈の中で債権債務関係を読み解き，その関係に豊かな内容を付与・注入する点，負債というわれわれの日常生活と密接に関わっているものが統治の手法・技術にもなりうる可能性を提示する点などである。これらの論点は，市場経済システムにおける人間と負債の関係を研究するための新たな視角と考え方を提示してくれる。

また，負債経済論は，現代市場経済システムにおけるパラドックス的な現象を理解するための手がかりも与えてくれる。

例えば，労働市場や社会保障における規制緩和などの新自由主義政策は，不安定就業者・低賃金労働者の増加や福祉・公共サービスの縮小などをもたらし，人々の購買力や購買意欲を低下させ，市場取引を抑制するが，その一方で，市場原理の追求による経済の「活性化」という新自由主義政策の正当性を確保するために人々の消費活動を活発化させなければならない[14]。この新自由主義の根源的・本質的・構造的な矛盾から目をそらすために，負債の仕組みや負債の論理が利用されていること（サブプライムローン問題はその典型例であろう）を，負債経済論は示唆している。人間の本性に根差した道徳や社会規範に

14）フーコーは，新自由主義において経済が政治的コンセンサスを生み，かつ国家が経済によって正当化されていることを重要な現象と認識し，1970年代に先見性をもって指摘している。例えば，「経済は，その保証人である国家のために正当性を生産する（The economy produces legitimacy for the state that is its guarantor.）」（Foucault, 2010, p.84）。

無断転載禁止

は，過度の利己主義に歯止めをかけ，行き過ぎた市場化を抑制する力があるとされる（Smith, 1759；渋沢，1927；Polanyi, 1944などを参照されたい）。これらの「市場抑制装置」が，負債経済において，市場・市場的領域を拡大させる力に転化する可能性があることは，負債経済論の理論的枠組みから導き出せる。この点にも留意すべきであろう。

これと関連して，これまで考察してきたように，負債（特に過重債務）が個人化を推し進め，人々の不安感を増大させかねない。なぜ負債問題によって，個人化と人々の不安感の増加が同時に起こるのか。債務返済に不安・苦悩を抱いているなら，個人化に抵抗する（例えば，他人に相談したり，助けを求めたりする）はずではないだろうか。これは，負債に，「自縄自縛」のようなパラドックスを引き起こす力があることを示唆している。なぜ，自ら縄を手にして自分を縛りつけるのか。なぜ，個人化の傾向を自ら拒否・排除するという主体性が構築されないのか。なぜ，負債から人間・人間生活にとって積極的かつ有意義な社会的関係を創出することが難しいのか。負債経済論は，新自由主義の下で負債が自助努力・自己責任を日常生活の意識として個々人に内面化させるという興味深い視点を示している。

先行研究が指摘するように，われわれは，負債が有する特性や影響力を分析・把握するための理論的道具を欠いている（ラッツァラート，2012）。負債がいかに経済・社会・文化・心理・道徳など，われわれの生活様式・行動様式と深い関連を持つ諸要素と相互作用し，人間の日常生活に影響を及ぼすかというメカニズムを緻密に分析することは，理論模索の上で一つの突破口になりうるであろう。

参考文献

エミール・デュルケム（1978）『社会学的方法の規準』，宮島喬訳，岩波文庫。

王　凌（2005a）「銀行貸出とマクロ経済（1）―クレジット・ビューの理論・実証研究の展望―」『経済論叢』，第176巻第1号，43-62。

王　凌（2005b）「銀行貸出とマクロ経済（2）―クレジット・ビューの理論・実証研究の展望―」『経済論叢』，第176巻第5・6号，696-708。

渋沢栄一（1927）『論語と算盤』，忠誠堂（国立国会図書館デジタルコレクション）。

大黒弘慈（2021）「負債・人間・贈与―負債経済論とマルクス経済学―」『社会システム研究』，第24号，363-398。

デヴィッド・グレーバー（2016）『負債論――貨幣と暴力の5000年』，酒井隆史監訳，高祖岩三郎・佐々木夏子訳，以文社。

デヴィッド・ハーヴェイ（2007）『新自由主義 ――その歴史的展開と現在』，渡辺治監訳，森田成也・木下ちがや・大屋定晴・中村好孝訳，作品社。

フリードリッヒ・ニーチェ（1940）『道徳の系譜』，木場深定訳，岩波文庫。

古川　顕（2020）『貨幣論の革新者たち：貨幣と信用の理論と歴史』，ナカニシヤ出版。

マーク・グラノヴェター（2019）『社会と経済：枠組みと原則』，渡辺深訳，ミネルヴァ書房。

マウリツィオ・ラッツァラート（2012）『〈借金人間〉製造工場――“負債”の政治経済学』，杉村昌昭訳，作品社。

Achtziger, A., Hubert, M., Kenning, P., Raab, G., and Reisch, L. (2015) Debt out of control: The links between self-control, compulsive buying, and real debts. *Journal of Economic Psychology*, 49, 141-149.

Ainslie, G. (1975) Specious reward: A behavioral theory of impulsiveness and impulse control. *Psychological Bulletin*, 82, 463-496.

Amit, N., Ismail, R., Zumrah, A. R., Nizah, M. A. M., Muda, T. E. A. T., Meng, E. C. T., Ibrahim, N., and Din, N. C. (2020) Relationship between debt and depression, anxiety, stress, or suicide ideation in Asia: A systematic review. *Frontiers in Psychology*, 11, 1136.

Babiarz, P., Widdows, R., and Yilmazer, T. (2013) Borrowing to cope with adverse health events: Liquidity constraints, insurance coverage, and unsecured debt. *Health Economics*, 22, 1177-1198.

Berisha, E. and Meszaros, J. (2018) Household debt, expected economic conditions, and income inequality. *International Journal of Finance & Economics*, 23, 283-295.

Bernanke, B. S. (1993) Credit in the macroeconomy. *Federal Reserve Bank of New York Quarterly Review*, 18, 50-70.

Bernanke, B. S. and Blinder, A. (1988) Credit, money, and aggregate demand. *American Economic Review*, 78, 435-439.

無断転載禁止

Bernanke, B. S. and Gertler, M. (1995) Inside the black box: The credit channel of monetary policy transmission. *Journal of Economic Perspectives*, 9, 27–48.

Bernanke, B. S., Gertler, M., and Gilchrist, S. (1996) The financial accelerator and the flight to quality. *Review of Economics and Statistics*, 78, 1–15.

Bernstein, A. (2021) Negative home equity and household labor supply. *Journal of Finance*, 76, 2963–2995.

Berns, G. S., Laibson, D., and Loewenstein, G. (2007) Intertemporal choice--Toward an integrative framework. *Trends in Cognitive Sciences*, 11, 482–488.

Boivin, J., Kiley, M. T., and Mishkin, F. S. (2011) How has the monetary transmission mechanism evolved over time? In *Handbook of Monetary Economics*, B. M. Friedman and M. Woodford eds. North-Holland, Amsterdam: 369–422.

Bridges, S. and Disney, R. (2010) Debt and depression. *Journal of Health Economics*, 29, 388–403.

Brown, S., Taylor, K. B., and Wheatley Price, S. (2005) Debt and distress: Evaluating the psychological cost of credit. *Journal of Economic Psychology*, 26, 642–666.

Caffentzis, C. G. (2016) Everyday life in the shadow of the debt economy. In: Schraube, E. and Højholt, C. (eds) *Psychology and the Conduct of Everyday Life*. London, UK: Routledge: 176–192.

Cordray, R. (2013) Protecting consumers in the financial marketplace: Keynote address, November 2, 2012. *University of Chicago Legal Forum*, 1, 1–13.

Dean, M. (2014) Rethinking neoliberalism. *Journal of Sociology*, 50, 150–163.

Donaldson, J. R., Piacentino, G., and Thakor, A. (2019) Household debt overhang and unemployment. *Journal of Finance*, 74, 1473–1502.

Drentea, P. and Lavrakas, P. J. (2000) Over the limit: The association among health, race and debt. *Social Science and Medicine*, 50, 517–529.

Dynan, K. (2012) Is a household debt overhang holding back consumption? *Brookings Papers on Economic Activity*, Spring, 299–362.

Ferguson, J. (2010) The uses of neoliberalism. *Antipode*, 41, 166–184.

Ferreira, M. B., de Almeida, F., Soro, J. C., Herter, M. M., Pinto, D. C., and Silva, C. S. (2021) On the relation between over-indebtedness and well-being: An analysis of the mechanisms influencing health, sleep, life satisfaction, and emotional well-being. *Frontiers in Psychology*, 12, 591875.

Fligstein, N. and Goldstein, A. (2015) The emergence of a finance culture in American households, 1989–2007. *Socio-Economic Review*, 13, 575–601.

Foucault, M. (2010) *The Birth of Biopolitics: Lectures at the Collège de France, 1978–1979*. New York: Picador.

Gathergood, J. (2012) Debt and depression: Causal links and social norm effects. *Economic Journal*, 122, 1094–1114.

Gunasinghe, C., Gazard, B., Aschan, L., MacCrimmon, S., Hotopf, M., and Hatch, S. L. (2018) Debt, common mental disorders and mental health service use. *Journal of Mental Health*, 27, 520–528.

Hatcher, S. (1994) Debt and deliberate self-poisoning. *British Journal of Psychiatry*, 164, 111–114.

Hennessy, C. A. (2005) Tobin's Q, debt overhang, and investment. *Journal of Finance*, 59, 1717–1742.

Hiilamo, A. and Grundy, E. (2020) Household debt and depressive symptoms among older adults in three continental European countries. *Ageing & Society*, 40, 412–438.

Hintikka, J., Kontula, O., Saarinen, P., Tanskanen, A., Koskela, and Viinamäki, H. (1998) Debt and suicidal behaviour in the Finnish general population. *Acta Psychiatrica Scandinavica*, 98, 493–496.

Hojman, D. A., Miranda, Á., and Ruiz-Tagle, J. (2016) Debt trajectories and mental health. *Social Science & Medicine*, 167, 54–62.

Houle, J. N. and Berger, L. (2017) Children with disabilities and trajectories of parents' unsecured debt across the life course. *Social Science Research*, 64, 184–196.

Iacoviello, M. (2008) Household debt and income inequality, 1963–2003. *Journal of Money, Credit, and Banking*, 40, 929–965.

Jappelli, T. and Pistaferri, L. (2011) Financial integration and consumption smoothing. *Economic Journal*, 121, 678–706.

Lazzarato, M. (2015) *Governing by Debt*. Translated by J. D. Jordan. South Pasadena, CA: Semiotext (e).

Lea, S. E. G., Webley, P., and Levine, M. R. (1993) The economic psychology of consumer debt. *Journal of Economic Psychology*, 14, 85–119.

無断転載禁止

Lea, S. E. G., Webley, P., and Walker, C. M. (1995) Psychological factors in consumer debt: Money management, economic socialization, and credit use. *Journal of Economic Psychology*, 16, 681-701.

Lusardi, A. and Tufano, P. (2015) Debt literacy, financial experiences, and overindebtedness. *Journal of Pension Economics & Finance*, 14, 332-368.

Meltzer, H., Bebbington, P., Brugha, T., Farrell, M., and Jenkins, R. (2013) The relationship between personal debt and specific common mental disorders. *European Journal of Public Health*, 23, 108-113.

Molina, C. A. (2005) Are firms underleveraged? An examination of the effect of leverage on default probabilities. *Journal of Finance*, 60, 1427-1459.

Morduch, J. (1995) Income smoothing and consumption smoothing. *Journal of Economic Perspectives*, 9, 103-114.

Myers, S. (1977) Determinants of corporate borrowing. *Journal of Financial Economics*, 5, 147-175.

Nettleton, S. and Burrows, R. (1998) Mortgage debt, insecure home ownership and health: An exploratory analysis. *Sociology of Health and Illness*, 20, 731-753.

Oksanen, A., Aaltonen, M., and Rantala, K. (2015) Social determinants of debt problems in a Nordic welfare state: A Finnish register-based study. *Journal of Consumer Policy*, 38, 229-246.

Ottaviani, C. and Vandone, D. (2011) Impulsivity and household indebtedness: Evidence from real life. *Journal of Economic Psychology*, 32, 754-761.

Polanyi, K. (1944) *The Great Transformation*. New York: Farrar & Rinehart.

Reading, R. and Reynolds, S. (2001) Debt, social disadvantage and maternal depression. *Social Science & Medicine*, 53, 442-454.

Richardson, T., Elliott, P., and Roberts, R. (2013) The relationship between personal unsecured debt and mental and physical health: A systematic review and meta-analysis. *Clinical Psychology Review*, 33, 2013.

Simon, H. A. (1955) A behavioral model of rational choice. *Quarterly Journal of Economics*, 69, 99-118.

Simon, H. A. (1957) *Models of Man: Social and Rational--Mathematical Essays on Rational Human Behavior in a Social Setting*. New York: Wiley.

Smith, A. (1759) *A Theory of Moral Sentiments*. London: A. Millar.

Venugopal, R. (2015) Neoliberalism as concept. *Economy and Society*, 44, 165-187.

Wang, L. (2013) The credit view revisited--From the viewpoint of bank lending behavior. *Sanken Ronshu*, 40, 11-21.

Webley, P. and Nyhus, E. K. (2001) Life-cycle and dispositional routes into problem debt. *British Journal of Psychology*, 92, 423-446.

Werner, R. A. (2014) Can banks individually create money out of nothing? --The theories and the empirical evidence. *International Review of Financial Analysis*, 36, 1-19.

Wood, J. D. G. (2020) Can household debt influence income inequality? Evidence from Britain: 1966-2016. *British Journal of Politics and International Relations*, 22, 24-46.

Wozniak, J. T. (2017) Towards a rhythmanalysis of debt dressage: Education as rhythmic resistance in everyday indebted life. *Policy Futures in Education*, 15, 495-508.

Yabroff, K. R., Zhao, J. X., Han, X. S., and Zheng, Z. Y. (2019) Prevalence and correlates of medical financial hardship in the USA. *Journal of General Internal Medicine*, 34, 1494-1502.

Zeldes, S. P. (1989) Consumption and liquidity constraints: An empirical investigation. *Journal of Political Economy*, 97, 305-346.

(2022年7月15日掲載決定)

無断転載禁止